リイド社
八月薫全集
第6巻「寝取られる男たち」

# 八月薫全集 第6巻

「寝取られる男たち」

contents

変態に濡れた貞淑妻……3
婚約者の意外な性癖……19
妻の陰部……35
良妻の淫らな陰部……51
T大学のサセ子の噂……67

俺は44歳のバツ一会社員。
もうこんなに濡らしてるのか。
早く入れて欲しいから…
だって…
彼女は45歳の人妻。テレクラで知り合い互いの変態性に魅かれ付き合い始めて半年になる。
まだおあずけだ。それまでこれで我慢してな。
あう
は…う
ああ
月に2回こうして会っている。

## 変態に濡れた貞淑妻

半年前初めて彼女に会った時の印象は電話で話したイメージとはちがい
地味で貞淑な奥さんといった感じだった。
彼女はテレクラは初めてで
結婚して以来旦那以外の男に会うのは初めてだったらしい。
俺たち2人は付き合い始めた当初は
どうした？早くこっち来いよ。
ええ…でも…
たまに会ってはセックスをする普通の不倫カップルだったのだが——
彼らだって見られたがってるんだ。
ほら。
気後れしあまり乗り気じゃない彼女に、俺はガッカリしていた。
彼女とは変態的なことをしたいと、日ごろから思っていた。
ほらあそこのカップル今始まったばかりだ。
俺がそういうヤツだと知ってて彼女も俺と付き合ったはずなのに…
やっぱりこいつも普通の女。
そう思っていたが。

はっ…
こんな貞淑ぶった顔をして
彼女のアソコはぐっちょり濡れていた。
やっぱりこいつは変態だ！
人は見かけによらないと言うが、彼女はまさにそんな感じだった。
カップル喫茶
彼女の変態性を確信したオレは
翌日、彼女の興奮がさめる前に行きつけのカップル喫茶に連れて行った。
なにこの店。
なんだかこわいわ……
そう言いながらも彼女の期待に満ちた顔つき。

カップルの行為が進んでいくにつれしだいに彼女の様子も変わって
あう
いい
彼女は身を乗り出して
真剣な目でカップルの行為を見つめ始めたのだ。
ダメ
あ…
や…だめ
はずかしい。

悪かった…
いきなり あんな所へ 連れていって… もう少し 考えるべき だった。
ううん 大丈夫…
すると 彼女のアソコは下着が 染みるほどぐっしょり 濡れていた！
あ…
？
彼女の 荒い息づかい
まさか…
俺は 彼女の下着の中へ 手を入れてみた。
彼女はあの場でも 感じていたのだ！

相手が 気に入らなければ 断ればいい。
よろしいですか？
どうぞ。
あ…え…
あっ
旦那と俺以外 男を知らない彼女が 感じさせられる姿を 見たかった。
……
おい。

なんだ こんなにして… ほんとは 欲しかったんじゃ ないのか。
だって あんな いきなり…
俺はますます 彼女への興味を かきたてられた。
んあ…
ここまで感じて しまう女 だったとは…
興奮している 彼女に テレクラへ電話 を掛けさせ 男を探させる ことにした。
そして直ぐに 丁度いい相手 が見つかった。
先ほど お電話で話した 黒木です。
どうぞ お待ちして ました。
あの女です。
変態に濡れた貞淑妻
さっきから 欲しくてウズウズ してるんです。
あなたは? 私は見てるほうが 好きなんです。
俺の前で 行為が始まった。
奥さん 大丈夫です 気を楽に してください。
はい…
おどろいたな。 こんな 清楚な方が 彼氏の前で 抱かれたがってる なんて……
……
どうして ほしいですか 遠慮しなくて いいんですよ。
電話では あんなに素直なのに 人前だと恥ずかしい ですか。
なのに 体はこんなに 感じてしまっている ……
ん…
あ
いやらしい 奥さんだ。

私の……
私のオ○○コにあなたの入れてほしい。
じゃあまずはしゃぶってくれよ。
ん…
んむ
ジュポ
ジュポ
うぐ
夢中で他人のものをしゃぶる彼女。

ここはどうかな。
あっ…
もうぐっしょりじゃないか
なんてスケベなマ○コなんだ。
ひっ
こんなにイヤラシイ汁を垂らして
何が欲しいか言ってごらん奥さん
そ
そんな…
さあ

あう！
俺の目の前で快感に乱れる彼女。
彼に見られてこんなに感じてるなんて
そんな…ああ
お前は淫乱なメス豚だ！
それを眺めながら俺は
俺はこの時最高の興奮を味わっていた。
そこ、だめああ…
だが…
攻められ続け快感に身悶える彼女を見ているうち
俺の中に強烈な嫉妬心が湧き上がってきて
おお出る…中に出すぞ
んあイキそう
う
ああ
よかったよ奥さん。

どうした？
そして俺は
どいてくれ。
あ…
んはっ
彼女の膣は男のでヌルヌルだった。
ん…
あう
あふ
んぐ
あ…
あ…
んあああ！

EP01／END

## EP02
## 婚約者の意外な性癖

ブオオオン
いえ 私も今 来たところです
彼女は大田弘美（仮名）39歳のバツイチ 子供はいません
俺は田中裕二（仮名）41歳のサラリーマンです
ガチャ
ごめん 待った？
結婚を前提につき合いはじめて3ヵ月になります
どこに行こうか
おまかせします
彼女とは結婚相談所の紹介で知り合いました
結婚コンサルティング
運命の人と出会う
写真では拝見していたんですが
実際に会ったらすごく綺麗で清楚な女性だったんです
こんな女性に出会える機会なんてもうないと思っていました
〝このチャンス絶対逃したくない〟
なんと彼女も俺のことを気に入ってくれたみたいで
俺はそれはもう飛び上がる程嬉しかったです
そうして交際が始まったんですが……
交際も1ヵ月ほど経った時
ホテル リード
彼女と初めてエッチをしたんです
ボッ
ボッ
彼女のみごとな身体に俺は大興奮
弘美さん
チ○ポもギンギンに勃って精力はばっちりでした
ですが彼女の反応はいまいちで
感じているようには全然見えなかったんです
うっ
ドク
ドク
気持ちよくなかった？
いえ そんなこと緊張してただけ……
俺はその時はその言葉を信じました

その後も彼女と何度かエッチをしました
彼女は気を使って多少感じたフリをしてくれるんですが
あ
ん
興奮してる俺に反して彼女の反応はどう攻めてもいまいちだったんです
俺のテクニックが悪いのか彼女が不感症なのか……
俺は彼女のことがよくわからなくて型通りのエッチしかできなくなってしまったんです
この先の結婚にも不安を感じましたでも綺麗で身体もバツグンの彼女を手放すにはもったいなくて
彼女も俺と結婚したいと言ってくれていて……
彼女の反応の鈍さだけが唯一の不満だったんです
この日のドライブデートの帰り我慢できなくて
人気のない公園に車を停めたんです
弘美さん
ん
彼女は拒みませんでした
こういう場所なら彼女も少しは燃えてくれると思ったんです
はっ
はっ
ギッ
ギッ
あ…
誰かに見られてるかもしれないこのスリリングさに
はっ
はっ
俺はとても興奮しました
でも……
ビタッ
ビタッ
うっ
結果は同じでした
なにか飲み物買ってくるよ
少しは感じてくれたように見えたんですが
エッチに夢中で気づかなかったんですが
俺たちの他にワゴンが1台停まっていたんです
気持ちいいエッチしてんだろうな……
その時はそう思ったくらいであまり気にしなかったんです

なにもない公園で自販機を見つけるのにけっこう時間がかかってしまいました
30分くらい経ったでしょうか
あれ？
車に戻ると彼女がいなかったんです
辺りを見回しても彼女の姿は無くて
てっきりトイレにでも行ったのかと思っていたんです
その時
あのワゴンが大きく揺れていたんです
俺はすごく気になってしまったんです
見たい気持ちを抑えることができなくなってしまって
俺はそっとその車に近づいたんです
窓にはスモークが張られていて中はよく見えなかったんですが
中から女の呻くような声が聞こえてきて……
あ…
んん……
俺はドキドキしながら目を凝らして中を覗き込んだんです

すると中には数人の裸の姿が……
3P？4Pか…？
え!?
俺は目を疑いました
数人の男にまさぐられている女は俺の彼女にそっくりだったんです
んん……
えまさかうそだろ
あの服あの下着
間違いなく弘美さんだったんです
ああっ

おばさん もう感じてんじゃないの!?
そんなこと…
やめ……
「やめろ」と言いかけて俺はドアにかけた手を止めたんです
ああっ
ぐぅ。
男が言うように俺の目にも彼女が少し感じてるように見えたんです
ああ
あ…
それは俺が見たことのない表情と声でした

ひっ
じゅぶぶ
しょっぱい
おばさんコレしゃぶってよ
あ
やめろ
ぐ
う
んん
俺もまだしてもらってないフェラチオを…
ぐぽ
う
いいよおばさん
彼女はアソコをしゃぶられながら頭を押さえつけられてチ○ポを根元までくわえ込んだんです
んぐ
げふ
あふ…
ああ…
おいひい
え
「おいしい」と彼女は言ったように聞こえたんです

ドア越しなので
はっきりと聞こえた
わけじゃありま
せん

彼女が
そんなことを
言うはずが
ないと思い
ながらも

そう言った
ように聞こえて
しまったんです

うう

お……
オレのも
しゃぶってくれよ

んは…

ん

2本
同時に

彼女は自分から
しゃぶってる!?

激しくピストン運動
する彼女が
本当に俺の彼女なのか

信じられ
ませんでした

ですが
凌辱されている
彼女の姿に

うこのオバサン
すごい
上手いよ

俺は興奮
していたんです

あっ

すげぇ
見ろよ

ああ
見ないでぇ

俺とのエッチじゃ
なかなか濡れな
かったのに

オバサンの
こんなに濡れてるよ

この時は
内股まで
ビショビショに
濡れていたん
です

たまんねえよ

オレ 入れて
いいかな

ジャンケンで
決めよーぜ

見たい

俺が知らない
彼女の姿を

彼らに嫉妬
しながらも
そんなことを
思っていたんです

あ
ぐ
ああう
うおおっ
ついに彼らは彼女に挿入してしまったんです
クチャ
すごいこのオバサンのすげえヌルヌルで気持ちいい
あ…あっ
そこからはイヤラシイ音が響いていて
ヌチャ
あっひっ
彼女の顔は上気して気持ちよがっていたんです
ああ
俺とのエッチじゃ感じなかった彼女が明らかに感じていたんです
やべ…もう出る…
中に出すなよ

なんでこんなヤツらに…挿れられて感じてるんだ
ああっ
びゅる
う
チ○ポを引きぬかれた彼女のアソコは大きく開いて汁を垂れ流し
その口元は薄ら笑みを浮かべているように見えたんです
じゃあ次オレ
ぐぷぐぷ
ひいい
んあう
彼女のあえぎ声はどんどん大きくなって
ああ
彼女自ら腰を動かし始めたんです
ずにゅ
ひいい

あの清楚だった彼女とはまるで別人でした
ひぎい
んああっ
よだれを垂らして髪を振り乱しよがり狂う姿は
あふ
淫乱女そのものでした
んはぁ
精液まみれになりながら凌辱されることを
ああっ
彼女は心から楽しんでいたんです
そんな彼女に……

俺は怒りと同時に今までに経験したことがない興奮を感じたんです
ぐが
おおすげえ
うぐ
ひいい
ああ出して
出る…オバサン
出るぞ
ちょうだい
ひいい
いく…いくっ
いぐう〜〜〜

EP03
妻の陰部

EP02／END

妻とその温泉旅館に行ったのは昨年の秋でした

俺は39歳 妻は37歳

いいところねー

ああ

妻は元同じ会社の後輩で3年前に結婚しました

なにかと忙しく旅行なんて新婚の時以来で

この久々の旅行に妻はとても喜んでいました

お互い夫婦生活にもマンネリを感じ始めた頃だったので気分転換にはいい時期でもありました

それに今回は旅好きの同僚に穴場として教えてもらった宿だったんです

確かに静かで落ち着いた雰囲気で食事もまあまあのんびりするには丁度いい所でしたが

それ以外は別段変わったところもなく…

私もう一回温泉入ってくるわ

あなたは

俺はいい

その間マッサージでもしてもらうよ

マッサージご希望の方は受け付けまで 内線03

俺は妻が風呂に行ってる間マッサージを頼みました

トントン

マッサージです

どうぞ

しつれいシマス

ヨロシクおネガイシマス

なんとやってきたのは言葉もたどたどしい東洋系の外国人だったんです

これにはちょっと驚きました

ああ…よろしく

外国人のマッサージ師なんて初めてだったのでちょっと戸惑ったんですが

ダンナサンかたこってマスネ

そう

デモダイジョウブマッサージおわったらス～～～キリスルヨウソじゃナイネ

気さくな彼女にその不安はすぐに消えたんです

イタタ
グィ
グィ
よく見ると若くて けっこう美人で
しかも この密着度
けっこう キツイけど これは効き そうだ
コレ 私の国の 古式マッサージネ
おお
その刺激的な マッサージに 心地好さを感じ 始めた時でした
なんと彼女はいつの間にか ズボンを脱いでパンツまる出しに なっていたんです
もうビックリ しました

ダンナさん
あ…え
ムニュ
彼女は 私の股間を つかむと
あと一万 くれたら ワタシのナカに 入れていいネ
なんという ことを…
一万追加すれば 彼女とエッチ できるというんです
突然のことに 俺は動転しました
しかし そろそろ妻が 風呂から 上がってくる頃…
こんなところを 見られたら 大変なことに なります
スッキリ スルヨ
正直 入れてもらいたいのは 山山でしたが 妻のことが気に なって…
けっこうだ もういいよ
どん
ありがとう
そしてすぐに 引き取って もらったんです
ソレジャ シツレイ シマス
ごくろう さま
そんなサービスがある マッサージだったなんて
まさか 同僚が言っていた 穴場ってこういう ことだったのか!?

そして
彼女と入れ替わる
ように
妻が風呂から
帰ってきました
ああ
いい湯だったわ
パタン
俺はまだ
動揺が
収まらない
ままで
あ
お帰り
今すれ違った
人かしら
どうだった
マッサージは
ああ
良かったよ
そう
ここに妻が
いなければ俺は
あと一万出して
彼女とエッチを
してたでしょう
そう思うと
さっき触られて
いた股間が
今さらながら
ムクムクと
反応してきた
んです
え
俺は
やめとけ
…と
言おうと
しましたが
ああ
私もマッサージ
頼もうかしら
ふと
ある思いが
浮かんだん
です
妻がそんなことを
言ったんです
妻が
あのマッサージを
受けたらどうなる
んだろう

俺たちの
セックスは
わりと淡白で
それがマンネリの
原因でも
ありました
・女性の方
大歓迎
そのマンネリを
解消する
きっかけが
欲しかったんです
今度も
あの追加の
サービスが
あるか
わかりません
でしたが
トントン
はい
どうぞ
俺は再び
マッサージを
呼んだんです
オマタセ
イタシマシタ
やって来たのは
今度も
外国人でした
お願いします
オマカセ
クダサイ
早速
期待と不安の中
妻へのマッサージが
始まったのです
その人の国の
古式マッサージ
だそうだよ
ヘェ…
俺が受けたのと
同じように
密着度の高い
マッサージが
施されていきました
イタタ
グリグリ

故意なのか
それともそういう
マッサージ方法なのか
けっこう
キツイん
ですね
コレガ
キクン
デスヨ
どう見ても俺には
不自然に押しつけている
ように見えたんです
妻は
それを
気にとめる
様子もなく
マッサージを
受け続けて
いました
この大胆な
動きのせいで
浴衣が開け
そうになり
妻はそれが
多少気になって
てるみたいで
ですが男は淡淡と
そのマッサージを続けたんです
男から妻の
胸元がよく見えて
いたと思います


それに
無防備に体を
こねくり回されている
妻の姿に俺は興奮を
感じ始めていたんです
オクサン
足ヲ広ゲテ
え
ダイジョウブ
気モチヨク
ナリマス
あ…
ちょ…
あ
ちょっと
あなた…
こんなの…
聞いてないわ
い…
いいから
続けて
もらえよ
大胆にも男は
妻の足を大きく
開いて太モモの
マッサージを
始めたんです

妻は恥ずかしそうにしながらも股間を押さえ男のマッサージを受け続けました

俺は沸き上がってくる期待と興奮の中

妻の姿を見続けたんです

ん

その姿はとてもエロティックに見えて

俺の股間もすでに反応していました

その時

あ

男の股間がふくらんでるのが分かったんです

彼も俺の妻を見て興奮してる

どうしマシタオクサン

いえなんでも

あ

ん…

俺は妻も感じ始めているのが分かりました

妻は時々俺に助けを求めるような視線を送るのですが

俺は無視しました

キモチイイデショオクサン

ん

あ

もっと妻の姿を見ていたい

……

俺以外の男に感じていることに負い目を感じているのか……

その気持ち良さを必死に抑えようとしている妻に俺の興奮はさらに高まっていったんです

こんな妻の姿を見るのはもちろん初めてでした

そんな男の
きわどいマッサージは
延延と続いたんです

それはまるで
その男とセックス
してるようでした

すでに
浴衣は開け
洩れる吐息も
抑えることが
できず…

アソコには
うっすらと
シミのような
ものが
浮き上がって
いたんです

淡白だと思っていた妻が

こんなに
感じているのを
初めて
見ました

そして
ついに

ダンナサン

ああぁ

ガクガク

ガク

アト一万クレタラ
モットキモチヨク
サセルヨ

俺はOK
しました

もっと妻の
感じてる姿を
見てみたい

すでに
妻のアソコは
糸を引くほど
ぐっしょりと
濡れていま
した

イキマスヨ

そして
とうとう

う

男は妻のアソコに
挿入したんです

ひあああぁ

妻が
こんなに感じる
女だったなんて
ひぃ
あ
妻が別の男に
犯され感じまくっ
てるというのに
ひぃ
俺は不思議と
ショックでは
ありませんでした
激しい男の腰使いに
妻は腰をくねらせ
ひぎぃ
んぐ
ぐは
悶えまくって
いたんです
それどころか
喜びを感じて
いたんです
ひぃ
んはぁ
ひぎぃ

俺は
よだれを垂れ流し
乱れまくっている妻に
今までに味わったことのない
興奮を感じていたんです
あな…
た
あ
男は果てることなく
その激しいセックスは
1時間に渡って
続いたんです
んが
ひい
その間
妻は何度となく
イキまくりました
妻の喘ぎ声も
もう声にならない
ほど枯れ果て
オクサン
イクヨ…
出…して…
出し…て
とめどなく
あふれ出る愛液は
シーツまでぐっしょりと
濡らして

EP03／END

## EP04
## 良妻の淫らな陰部

俺は40歳の結婚3年目になるサラリーマンです子供はまだいません

ただいまー

お帰りなさいあなた

妻のえり子は俺より3つ年下で 社内恋愛で結婚しました

出張お疲れさま

厳格な家庭で育った彼女ですが真面目で明るくてそんな彼女の性格に惚れたんです

待っててねもうすぐ夕食できるから

ああ

この日も出張から帰り 寝室で着替えをしていたんです

なにげなくベッドの乱れを直していた時……

！

見つけてしまったんです妻が隠し忘れたバイブレーターを

それでね佐藤さんの奥さんがね……

俺は軽くショックを受けていました

そんな妻がいったいどこでバイブを購入したのか……

しかもあんなエグいバイブを

この真面目な妻がバイブを使うなんて

そういう女だとは思ってなかったからです

自分で買いに行ったのか？

でも……

俺が出張に行ってる間バイブで自分を慰めていたのかと思うと

あ——

いくぞ…

ううっ

そんな妻にとても興奮したんです

それから……
家のパソコンの履歴から
あのバイブの購入先が
わかったんです
俺は自分の仕事部屋で
そのサイトを見たん
です

ははん
ここの通販で
買ったのか

そこはアダルトグッズを
販売しているサイト
でした

あのバイブも
載っていました

あいつ
こんなサイト
覗いてたのか

妻の秘めた変態性を
垣間見た感じがして
しばらくそのサイトを
眺めていたんです

ですが

拘束具のサンプルを
見ていた時でした

え!?

妻に似た女が
写っていたんです

目は隠れていましたが
妻そっくりの体つきをして
いたんです
名前はサエコとなっていました

ですが
他のサンプル画像にも
妻に似た画像があって

どれも妻の特徴
そのままだったんです

いや…
まさかな
……

はじめは
ありえない
と思って
たんです

えり子…
なのか!?

いや…
なにバカな
ことを……

そんなこと
あるわけない
じゃないか

妻の性格からして
そんなこと出来るはず
ないと思ったんです

バイブは購入できたとしても
ネットで裸体を晒すなんてこと
するはずない

そう思ったん
ですが……

頭の片隅に
ひょっとしたら
という気持ちも
ありました

それは
俺の中にある
願望だったの
かもしれま
せん

あの真面目な
妻が
もし こんなこと
してたらと思うと
とても興奮
したからです

それから
俺はこっそり
そのサイトに
アクセスしては
画像を見て
楽しんでたんです

あれは
妻ではないかと
疑う気持ちが
日々 増していった
んです

でも
見れば見るほど
妻にしか見え
なくて…

同窓会は
明日だったか?

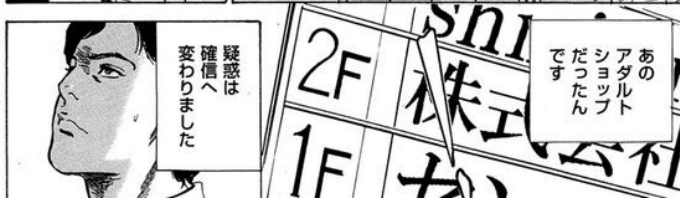
そうよ
夕方6時から
夕食は作って
おくから

ああ

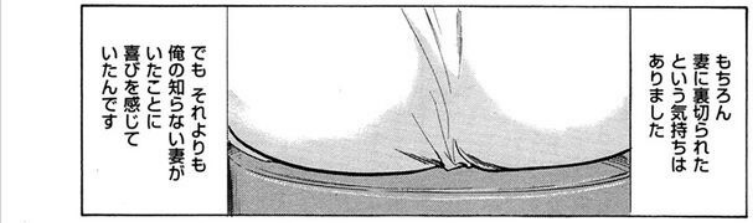
お風呂もう沸いてるけど
ああ先 入っちゃえよ

俺は隙を見て妻の携帯をこっそり覗いてみたんです
そこには 店長と名乗る人物からメールが入っていたんです
B 店長
Sub Re:
明日の撮影楽しみにしております。予定が変更したらメールください
-END-
明日の撮影ってなんだ!?同窓会じゃないのか!

翌日俺は妻の後をつけたんです
明らかに同窓会とは別の場所に向かっていました
そして 着いた先は


あのアダルトショップだったんです
疑惑は確信へ変わりました
2F
1F

同窓会どうだった?
楽しかったわよ
20人くらいは集まったかな
そうか……
妻は嘘をついている
俺は それ以上は聞きませんでした
みんな定期的に集まろうって話も出てるのよ


もちろん妻に裏切られたという気持ちはありました
でも それよりも俺の知らない妻がいたことに喜びを感じていたんです

数日後新たな画像が掲載されました
それに
その画像を思い浮かべながらする妻とのセックスは格別なものがありました
ああ

ですがそれは気持ちの中だけに収めて
妻に気づかれないようにいつも通りにしたんです

そして出張先で妻の画像を見ながらオナニーしようとした時のことでした

!?

それらの画像の下に使用法を説明するためのサンプル動画が設けられていたんです

早速それをクリックしてみたんです

あ

そこにはグッズを装着されていく妻が動画で映っていたんです

あ…

しかも声まで……明らかに妻の感じている声でした

んぐ

画像だけより動画では よりリアルに妻の あられもない姿を感じられて

それは興奮しました

うう…

我が妻ながら画面の中の妻は本当に魅力的でした

ビリッ

うおっ

何度もその動画でオナニーしまくったんですが

所詮使用法の説明のみの動画なので数分で終わってしまうんです

それに顔とアソコには大きなモザイクが掛かっていて…

しばらくはそれでも我慢してたんです

もっと妻の動画を見たい……

そこで俺はサイトにあるお問い合わせにメールを出したんです

購入者の○○○です。

MS ゴシック

商品を購入してるものですなんですが 私サエコさんファンで、サエコさんがグってあめられてる動画をっと見たいのですが今後も掲載していただけないでし

商品の購入者を装い彼女のメチャメチャファンだということをアピールしたんです

でも次第にそれでは満足できなくなっていったんです

俺には絶対見せない裏の顔を……

こんなメールで希望が叶えられるとは思いませんでしたが

せめてもの俺の気休めだったんです

すると

なんと メールの返事が返ってきたんです

そこには

えっ

リンクページの商品を提供してるあるサイトに

当サイトのリンクのページにあります
SMファンのサイトに　サエコさんの
動画がアップされています。
URL：http://hwm8.gyao.ne.jp/k-haduki/top2

妻の動画があると書いてあったんです

俺の胸は高鳴りました

早速そのサイトを見たんです

SMファン

カチッ

そのサイトには 動画の一覧がズラリとあったんです

この中に妻の動画があるっていうのか

その中に妻と思われる画像があったんです

でもそれは 課金しないと見られなかったんです

俺は迷うことなく急いで登録をしてその動画をダウンロードしたんです

カチッ

あ！

再生すると

なんとモザイク無しで妻の顔が映っていたんです

妻以外に2人の男がいました

俺は期待でドキドキしながらこの動画を食い入るように見つめたんです

奥さん このことダンナは知ってんの？

悪い女だな

いいえ

ああ

こんなに乳首立たせて

2人の男が妻の乳首を責め始めて…

う

あ…

すでにこの時点で妻が感じてるのがわかりました

敏感だな 奥さん

じゃあ 奥さんのマ○コ見せてもらおうか

そう言って男は妻の股を開いたんです

ああ
恥ずかしい
妻のアソコにはモザイクが掛かってたんですが
濡れてるのが確認できるくらい薄いモザイクだったんです
ひっ
これが欲しいんだろ
俺は今までに味わったことのない興奮を感じていました
妻はその責めに体を震わせ身をよじらせ感じまくってたんです
俺のもしゃぶってくれよ
んぐっ
奥さん後ろの穴もヒクヒクしてるぜ
そんなに欲しいのか
男はあろうことかアナルにまでバイブを挿入していったんです
ひっ

すんなり入っちゃったよ奥さん 普段もアナル弄ってるんだろ
んぐ ひいっ
俺以外の男に責められてこんなに感じてる妻に嫉妬する気持ちはありました
でもこんなにも身悶え感じている妻に
俺のチ○コは今までにないくらいの勃起をしていたんです
そして
最後は男たちに次々とザーメンを口の中に注ぎ込まれてたんです
んがっはっ
THE END
なんとも言えない脱力感におそわれました
ハァ
あれが俺の妻なのか
本番までしなかったのはもしかして俺に操を立ててるのか!?
妻があの男達に犯される姿を思い浮かべただけで堪え難いものがありました
ハァ
でも
俺のチ○コは動画を見終わった後でもまだ ギンギンに勃起していたんです
もっと見たい…

激しい葛藤の中 俺はそのサイトに 本番を見たい旨のメールを出したんです

数日経ってもメールの反応はありませんでした

それでよかったのかもしれません

考えてみたら俺のメールで動画の内容が変わるなんてあるわけないんです

ハァ ハァ

数日後 妻の動画が更新されたんです

んぐ

すげぇ 奥さんのこんなに拡がってるぜ

俺が出張中にまた撮影したんだと思います

前回と同じく激しく男達に責められていました

ひい

奥さん ほんとにコレが好きなんだな

でもこんなのよりもっと別のモノが欲しいんだろ

今日 正直に言ってみなよ 奥さん

ううう

いや… そんなこと…

いつも我慢してたんだろ?

今日は本当にして欲しいこと言ってみなよ

ほら ダンナには黙ってればわからないって

オ…

オチ○チンが欲しい…

マ○コとアナルにオチ○チンください!

妻はそう言ったんです

まさか

望み通りにしてやるよ 奥さん

2人の男が妻の両穴にチ○コを埋め込んでいったんです

ぐじゅ ぐじゅ

んぐあぁ

ああ

妻は犯されたんです

マ○コとアナルにチ○コを根元まで咥え込んで

これが俺の妻なのか

ぐひぃ

まるで獣のような声で喘ぎまくってたんです

んがあぁ

犯され善がり狂う姿は別人にしか見えませんでした

ぐぶぶ

そんな妻の顔は
たまらなく
いい表情をして
いたんです

ぐあぁ

ああ
いいよ えり子
きれいだ

ステキ
だよ

いぐ
いぐぅ〜〜〜〜

ううっ

ぐはぁああ

俺は
その画面の中で
悶えまくるエロ女に
たっぷりとぶっかけて
やったんです

それから

妻は
変わらず
良妻を
演じ
俺は
こっそり
動画を
楽しむ
日々が
続いてます

EP04／END

これは5年前に俺が実際に体験した話なんですがウソのような話なので

信じられない方はどうぞ 都市伝説だと思って聞いて下さい

名前は木村勇次(仮名)といいます 当時は東京の南部にあるT大学に通う学生でした

なあ やっぱり今日はやめにしないか

当時 学生の間である噂があったんです

その噂とは 大学の近くに 誰でもエッチさせてくれるサセ子がいるというものでした

バカかお前 今さらなに言ってんだよ

サッカー部でもない お前の為にどんだけ先輩に頭下げたと思ってんだよ

でもよォ タダでヤラせる女って ほら…病気とか怖いじゃん

ゴム使うから 大丈夫だって

まさかお前 ビビってんのか?

そんなんじゃねぇよ

心配すんなって 年食ってるけど それなりには 美人だからよォ

実はその噂は本当だったんです 実際にこの友人は サセ子に 一回相手をしてもらったそうなんです

念を押すけど 絶対誰にも言うなよ

それはサッカー部員の一部の人間だけが知る秘密で もう卒業した先輩が 街で ある女をナンパしたのが きっかけなんだそうです

とにかく その女が 好き者でよォ 一緒にいた先輩の友達 とも次々とヤっちゃった らしいぜ

……

あの腰の振り方は 確かにヤリマンだな

俺はこの友人の 親友ということで 特別に 許可されたんですが…

着いたぞ

そこは大学から1キロほど 歩いた埋め立て地で

工事用の資材や重機が 置かれていました

よぉ 遅ぇーよ

すいません

こんなところに 本当にサセ子が いるのか?

お前か こいつの 友達ってのは

はい

上級生らしき人物が 俺に声をかけて きて

今夜のことは誰にも 言うんじゃねーぞ

ホラ これ使えよ

今すぐにでもこの場から 逃げ出したい心境でした

本来ヤリたい盛りの学生なら タダでエッチできるなんて ラッキーなことなんでしょうけど でも俺は ビビってたんです

なぜなら 俺はまだ童貞 だったからです

そのことは友人にも ナイショでした エッチにはむちゃくちゃ 興味があったし 友人のサセ子の話も すごく羨ましく 聞いてたんです

そんな俺を 友人は 誘ってくれたんですが なにかと理由をつけて 断ってたんです でもついに断る理由が 見つからなくなって しまって……

初めてだから 特別に

お前を一番に やらせてやるよ

え

心の準備もできてないうちに俺が一番にヤれだなんて…
どうしたんだよ遠慮すんなよ
やっぱり俺…
早くしろよヤリたいのはお前だけじゃねーんだから
どうしよう
ムリだ！上手くできるわけないみんなに童貞だってバレる
どん
サセ子が一体どんな女なのかも分からないまま…
俺はブルドーザーの前に誘導されたんです
あっ
なんとそこにはブルドーザーのブレードの中に女が横たわっていたんです
え…これがサセ子!?
歳は30半ばぐらいで少しキレイなごく普通のおばさんだったんです
きて
戸惑ってる俺を引き寄せ
いきなりキスしてきたんです
んぐ
キスすらしたことなかったのでもう驚いてしまって…

もう緊張し過ぎてこの時のキスの感触なんて覚えてません
ぷは
どうしたの？
いえ…あの…
キスもまともにできない俺に 彼女はやさしい口調でそう問いかけてくれて
あの…じつは俺まだ経験なくて…
彼女に童貞を告白したんです
大丈夫よ
彼女はそう言うと俺のズボンのチャックを下げて 縮まっていたチ○コをさすり始めたんです
初めて他人に触られて彼女の柔らかい手の感触と
ぁ
ぁぁ
自分でするのとは違う動きに チ○コがムクムクと反応したんです
いつの間にかゴムを被せられていて
ぁぁ
そしてそのチ○コをアソコへ誘導していったんです
彼女は腰を浮かせて俺はチ○コを埋め込んでいったんです
うぁ…
気持ちいい…
ぐぷ
あっ
チ○コの先にヌルっとした感触がしたと思うと
うぁ
生あたたかくてヌルヌルしたものにチ○コが包み込まれていって…

なんだか すごく恥ずかしく なってしまって……
すみません……
でも そんなヘタレな俺に 彼女は
いいのよ
気持ち 良かったわ
そんなやさしい言葉を かけてくれたんです
俺を童貞から卒業 させてくれて その温かく包み込んで くれるような彼女を 俺は好きになって しまったんです
彼女とエッチ できるのは 平日の夜 週に3日ぐらいで 彼女がいつ 来るかは その日 終わった後に 決めていたんです
ぁ
ぁぁ
それからという もの 俺は彼女に 会いたくて そこに入り浸る ようになったん です
彼女の体を… マ○コの感触を 味わう余裕も 出てきました
ぁぁ
上手よ
名前も教えて もらいました 「タ子さん」
すげぇよ タ子さん
んぁ…
俺はこうして彼女と してる時が 一番充実感 を得られたんです
ぁぁ タ子さんと もっと一緒にいられたら 彼女に好きなことを 告白したんです
んぁぁ
そして 思い切って俺は
彼女は突然のことで 驚いていましたが 誰にも言わないと いう約束で携帯の番号 を教えてくれたんです
それから

もう夢中 でした
そのまま 動いて
はい…
夢中で 彼女の言う通り 腰を激しく動か したんです
おそらく 腰を振ったのは 数回程度だったと 思います
これが 女のマ○コ！
う
ぁ
ぁ
ヌルヌルして 気持ちよくて
もう発射しそうに なってることすら 気が付く余裕も ないまま……
んぁ
うっ
ビクン
すぐに俺は イってしまったんです
ハァ
ハァ
ハァ
あっという間の 出来事でした

こんばんは 夕子さん
いらっしゃい
俺は努力の甲斐あって 彼女のアパートに ちょくちょく通うように にまでなったんです
やだビショ濡れ じゃないの
突然 降られ ちゃってさ

バカね 早く乾かさないと カゼひいちゃうわ
俺は実家暮らしなので 彼女のアパートに来る時は サークルの友人の家に泊まると嘘をつきました
普段の彼女はまったく 別人のようでした
お風呂 沸かすから 入っちゃいなさい
やさしくて 俺のことをすごく 気遣ってくれて

それはまるで 母親のような… いや それ以上の…
今日は勇次くんの 好きなカレー作ったのよ
彼女は昼間 会社勤めを してました
彼女は俺がこうして アパートに通うように なっても あの現場で サセ子を続けてたんです
もちろんサセ子を やってることは誰も 知らないそうです
そんな真面目な 彼女が なんで サセ子なんかやって るのか わからなかっ たんです
ですが その疑問は すぐに解けました

彼女は人が変わって しまうほどエッチが 好きだったんです
勇次くんの 固いわあぁ
腰を激しく 動かしながら
彼女は 俺のチ○コで 喘いでたん です
初めは彼女の その変貌ぶりに 驚きました
俺の体が ビクビクと反応 してしまうほど 気持ち良かっ たんです
あの埋め立て地の ように周りを 気にすることも 時間を気にする こともなく
彼女のマ○コの 快感に酔い痴れ ました
彼女のマ○コの膣は 蜜壺のようにドロドロで その膣で俺のチ○コは ぐちょぐちょこねくり回 されて
彼女も現場では出さない 獣のような声で喘ぎ まくったんです

でもそれだけではありません
興奮も最高潮に達すると
その汁まみれのチ○コを今度はアナルへと挿入したんです
それは初めての感触でした
う
ぁ ぅ
ぎひぃぃ
んがぁぁ
がはぁぁ
彼女はチ○コが根本までずっぽりと埋まってしまうほど激しく腰を振りまくってくるんです
そのチ○コが窒息してしまうような彼女のアナルの締めつけが快感になって俺の全身を駆け巡りました
夕子さん…
しかも そのチ○コをアナルから引き抜くと
今度はマ○コへ…
それを交互に繰り返しながら彼女は白目をむき
髪を振り乱し喘ぎまくったんです
がはぁ
あぐ
ぐぁぁ
ひぎぃ
うう
んはっ

アナルへ挿入する時の抵抗感と引き抜く時の吸引力…
ぐは
ひぃぃ
マ○コのグチョグチョの気持ち良さが交互に襲ってきて……
がぁぁ
ぐはぁぁ
すごいよ夕子さん
むぁぁ
夕子さんのアナルすげぇ気持ちいいよ
ぬぁぁ
むはぁ
彼女は更に激しさを増してよだれも垂らしながら狂ったように乱れまくってたんです
ひぃぃ
出る…出るよ！
彼女のアナルの味まで知った喜びとめくるめく快感に…
うう
んがぁぁ～～～
イグぅ～～～～
イグぅ～～～～

彼女はサセ子をやめることを約束してくれたんです
これで彼女は俺だけのものになった……そう思ってたんです
ところが2週間ほどが過ぎた頃から
え 今日はダメなの？
今夜も残業？
じゃあ明日は？
明日もムリ？
こんな風に会えない日が多くなってきたんです
すごく イヤな予感がしました
まさかとは思いながらも不安で居ても立っても いられなくてあの埋め立て地に行ってみたんです
するとあのブルドーザーから声が聞こえてきたんです
おお すげぇ
おお
俺はそこへ近付いて覗いたんです
おお
あ……
んが
うぐ
たまんねぇ
そこには5人の男と交わる彼女がいたんです

んがあぁぁぁ
ビリ
ビリ
ビリ
俺は彼女のアナルでイってしまったんです
夕子さ～～～ん！
もう俺は彼女の体無しではいられなくなっていました
夕子さん 頼むから他の男とエッチするのやめてくれよ
もう耐えられないんだよ
俺はそう彼女に懇願したんです
わかったわ
勇次くんがそこまで言うんなら
夕子さん……

俺だけのアナルなのに
俺より太いチ○コを両穴に挿入されて気持ち良さそうに喘いでたんです
しかもマ○コとアナルに同時に2本咥え込んでいたんです
すげぇこいつの肛門すげぇ締まる
んがぁ
ふぐ
んがぁ
ぐひっ
ふぐう
すげぇもうイっちまうよ……
膣に出すんじゃねぇぞ
しかもゴム無しで生で挿入してたんです
次俺に挿入させてくれよ
うおお
んああ
がはあぁぁ

男達は代わる代わる彼女のマ○コとアナルを生で犯していったんです
おお
がはぁ
ぐあぁ
うおお
彼女はザーメンまみれになりながら俺にも見せたことのない恍惚の表情を浮かべてチ○コをむさぼっていたんです
見ろよこの女のマ○コもアナルもこんなに拡がっちまったぜ
すげぇ奥まで見えんじゃん
なんだよ上も下ももうガバガバじゃねーか
突いてぇ〜〜〜
奥まで突いてぇ〜〜〜
先輩次俺に代わって下さいよ
もっと〜〜〜もっと挿れてぇ〜〜〜
早くぅ〜〜〜
欲しいの〜〜〜
もっと〜〜〜

彼女は両穴を犯され続けながら 一時もチ○コを放さず

うおお

んがぁぁぁ

ドブ

ガクガク

ビクン

体をガクガクとケイレンさせながら何度もイキまくったんです

最後には中出しされてザーメンまみれの姿でまだチ○コを求めてる彼女を見た時には

お願い挿れてぇ——

ブピ

もう俺の心は離れていました

現在 その場所はマンションが建っています

何度か彼女から電話が入ったんですが俺は 出ませんでした今はサセ子の噂は聞きません

第6巻／完